
貴方と僕の携帯恋愛～僕は貴方を傷つけた～

ゆーき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貴方と僕の携帯恋愛～僕は貴方を傷つけた～

【Zコード】

Z0262BA

【作者名】

ゆーき

【あらすじ】

大学生が大人の女性が恋に落ちる

二人はアルバイトさきが一緒

出会つことがなかつた二人

携帯のメールをとおして二人は
少し距離が近づく

メールという現代の「コミュニケーション」
だけどそこにはみえないから
簡単に言えてしまうことが…

そこには大学生のウソ…

それでも一人は離れられない…

本当の気持ち

愛してる形

一人の最後にはさよならか優しさか…

大学生の気持ちの本当は

貴女の本当の気持ちは

ウソ…と優しさつなご…

決めるのは…

出会い

プロローグ

貴女と出会ったのは……

偶然なのか……
奇跡なのか……

運命なのか……

出会うことがないはずの貴女に

僕は出会った……

大人な貴女は純粋でまっすぐな笑顔……

ひまわりのような笑顔……

貴女の本当を知るまでは……

貴女が何を思い……考え……
生きているのか……

僕は知りたくなった……

貴女の言葉を知りたくなった……

第一章

僕が貴女を知ったのは

大学2年の夏……

本当は前から知っていたが

貴女と話を初めてした時……

貴女を知った

バイト先の休憩で休憩室に行くと

貴女は泣いていた……

僕の知ってる貴女は……

いつも笑って……

みんなを笑顔にさせる貴女

離婚して子供を育てる貴女を

強い人だなと思っていた……

泣いてる貴女は僕のがきたことに気付くと

顔をあげて僕に恥ずかしそうに

「誰にも言わないでね」

と笑った……

その笑顔はとても子供みたいで

抱きしめたい気持ちになった……

僕はとっさにうなずいた

「あらがとつ……」

貴女は顔を下に向けて言った

泣ぐのを堪えるよつた……

僕は貴女の涙を知りたくなつた……

貴女に少し近づく

「おはなづこまく」

貴女がいつものようにお店に入ってくる

僕は少し頭を下げた

「元気?」

貴女は少し微笑みながら僕の顔をみていく

「元気ですよ……」

「ならよかつた」

貴女はいつもと同じように仕事を始めた

昨日泣いていた貴女は今日はいなかつた

僕は少し寂しかつた

たまたまその日は僕ともう1人と貴女は休憩が
一緒になつた

「ちかさん休憩一緒だからビック食べに行こうよ

もう1人のバイト仲間、雄平が貴女を誘つてた

「うへん……こいよー 田沼くんも行く?」

貴女は僕に笑いながら誘つてきた

「別にいいよ

僕が言つと貴女はちょっとクスッと笑いながら

「決まり

と言つて貴女はこつものように仕事を始めた……

「それじゃ休憩行つて!」

店長が僕らに言つた

僕らは近くのファミレスに行くことにした

「田沼……お前何たべんの?」

「ホットケーキ!」

「君はお子ちやまー?」

貴女はあはつと笑つた。僕は初めてあはつと笑う人を見た。あはつまるでマンガの女の子みたいに笑う。ちょっと僕はおかしくなつた。

「いけないの?」

「よいけど…ホットケーキなら焼いてあげるのに
私のホットケーキおいしいんだよ…」

貴女は坦々に僕をまつすぐみて言つた

「ふうん」

「ちかさん今日うちに遊びに行つていい?」

雄平がちかさんに聞いた…

雄平は何度か貴女の家に行つてるらしい…
子供が3人いるらしく、その子たちがなついていると前に聞いて知
つていた…

「いいよー子供が喜ぶし…」

貴女は迷わず答えた。

「俺も行つていい?…」

つことつさに聞いてしまつた…

「来たいの?…別にいいけど…」

あはつとまた笑いながら答えた。

「じゃ…アドレス教えてよ!」

「うーん…イタズラメールしないでよ」

と貴女とアドレスを交換した。

僕は貴女のうちに行けることアドレスを教えてもらつて…ドキド
キはじめた…。

貴女の笑顔は

アルバイトが終わる時間を僕はそわそわして待つた…

一緒に時間に貴方も仕事が終わるからだ…

雄平も一緒に時間に終わる

雄平は必ず仕事が終わる時間が貴女と一緒にだと家の方向が同じたから一緒に帰るから…僕も今日は貴女と一緒に帰りたかった。

アルバイトが終わって休憩室に行くと貴女と雄平が先にいた。

「ちかさん一緒に帰ろうぜ！…！」

やはり雄平が貴女を誘っていた。

「いいけど…」

と貴女は笑いながら答えた。

「俺も一緒に帰つていい？」

「田沼くんも一緒に方向？…」

貴女はとまどつた表情をしていた。

「今日行くのに家知らないし…暇だから。」

「そつかわかった！！」

貴女はあはつと笑つた。

三人で自転車で帰つていると…貴方が

「カラオケ行きたいな…」

とつぶやいた…

「カラオケ??」

雄平が言つ。

「今日子供が寝たら行こうよ…」

「なんで?」

僕が言つと

「ストレス解消!!」

「しようがないな…」

雄平が笑う。

そんな話をしながらじばりくすると雄平は

「俺はこっちだから」と道を曲がつた。

「あとでねーー!」

貴女は手をふりながら答えた。

そこからはたわいもない話をしながらちかさんの家まで行った。少し古いアパートの前で貴女は「うち」こー一階の右端ね…」「わかった…」「6時に来てね…」「じやどっかで暇つぶす…」「ごめんね…うち汚いから…」と貴女は笑つた。

僕は貴方の笑顔にどきっととしていた…この気持ちはなんだろ…恋?
まさか…そんなわけないと僕は僕自身を笑つた。
でもなぜか貴女に会いたかった…

貴女の寂しさ

6時半ちょっと前に…貴方の家の前についた。
チャイムを鳴らすか考えていると。

雄平がやって来た。

「早く鳴らせよ…！」

僕はチャイムを鳴らした。

チャイムがなるとバタバタと足音がした。

「誰ですか？」

女の子の声がした。

「雄平だよ。」

ガチャガチャとカギをあけドアが開いた。

ドアからから田の大きな女の子が顔をだしにこつり笑った。

「どうぞ」

と貴方の声が奥からした。

僕と雄平がゆっくり家に入ると貴方が食事をつくり笑っていた。

「今日はお好み焼きにしたの。田沼くん食べれ る？」

「食べれるよ。」

「ならよかつた！！」

そういうとホットプレートでお好み焼きをやきはじめた。
慣れた手つきでお好み焼きを焼くあなたに、貴女が料理をすること
が不思議に思えた。

なぜなら、貴女は生活感を感じない人だった。
子供がいると聞いていたが貴方が子供を育てる」とか疑問だった。

「ねえねえ…一緒にゲームしよう？」

僕の服を引っ張り、さつきとは違う田がまた大きな男の子が僕を見
上げていた。

「たかし！…」はん食べてから…！」

貴方が男の子に言った。男の子はちょっと寂しい顔をしてしづしづ
あきらめて、テレビを見始めた。

お好み焼きが焼きあがりテーブルにつくと貴方が取り分けた…お好
み焼きを食べ始めた。

その時…貴方の携帯に着信メロディが流れた。
誰の曲か知らない…切ないメロディ…

貴女は携帯を手にとり…

メールを読むと…貴方から笑顔が消えた…
切ない顔…

僕は貴方の切ない顔に胸が苦しくなった…

お好み焼きはとてもうまかった…。

食べ終わると子供たちとゲームをして遊んだ。
ひとなつっこい子供たちだ。

夜9時になると貴方は子供たちに寝るように言つと、子供たちはしぶしぶお布団に入つて数分後には寝始めた。

「じゃカラオケ行こうよー」

貴方が笑ながら僕達に言つた。

「大丈夫なの？」

僕が聞くと…

「大丈夫だよ…もう少しでサッカーからお兄ちゃんが帰つてくるからー！」

お兄ちゃん?まだ子供がいるのかと驚いた。

「お兄ちゃんつて?」

「中学生の男の子がいるの…。」

貴方は中学生の子供がいる人に見えなかつた…
やはり不思議な人だ。

三人でカラオケに行くと、貴方は唄う曲を決めていたのかさつといれて…曲が流れ始めた…

知らない曲だつたが貴方の歌声にほつとする気持ちになった。

僕も好きな曲をいれて歌つた

「上手だね…」

貴方はあはつと笑ながら聞いていた

貴方の好きな人…

貴方の寂しい顔を僕は忘れられなかつた…
誰が貴女にそんな顔をさせるのか…
僕は知りたかつた…

僕は次の日の夜に貴女にメールをしてみることにした。
いざメールしようとするが、なんて書いていいのか分からなかつた。
だからありきたりのメールを送つた。

「昨日はありがとうございました。
お好み焼きうまかったです。
子供たちもいい子だね！！」

数分後貴方からメールが届いた…

「どう致しまして。子供たちも喜んでたよ！
また来てね（笑）」

僕は考えた…なんて聞けば良いのかと…
いい考えは浮かばない…

「そりなんだあ！
良かつたよ！また行きます。
ちかさんは誰か好きな人いるの？…」

なんてストレートだが…やつぱり遠回しに聞くのはめんどくさつだったからだ。

やはり数分後にメールがきた。

「うん (*^_^*) おいで (笑)

なんでもんなこと聞くの (笑) 「

やはり僕の聞きたい答えはこなかつた…

「いや…なんとなく。

昨日…携帯にメールがきた時に寂しい顔をして たから。
好きな人かなって?」

貴方の返信は今度はすぐにはこなかつた。

1時間経つて携帯がなつた…

「うーん…いるよ (笑)

別に寂しい顔なんてしてないもん。」

やはりいるんだ…なんとなく僕は貴女の好きな人はわかつたが聞い
てしまつたら…貴方からメールがこない気がしたのでこう送つた…

「ふーん 本当? (笑)」

貴方はなんて答えるだろ? うか
30分待つて携帯がなつた…

「さあ… (笑)

君には関係ないでしょ…

僕は関係ないって言われて、胸がちょっと痛かつた… 僕は貴女をも

つと知りたいと思つた

貴方とカラオケ

僕は毎日貴方のことを考えるよつになつた…。

貴方はいつも笑つていつも優しい。

誰にでもそつだ… どうしてそんなに優しくなれるのか不思議なくらいだ。

貴女には不思議がたくさんある。

不思議な貴女に僕は近づきたくて仕方がない気持ちが僕にはたくさんある。

僕はまた貴女にメールをした。

「ちかさん今日カラオケ行かな い（笑）？」

貴方からメールがくるかドキドキした。でも、すぐに返信はきた。

「何時に？」

「何時でもいいよ…」

「うへん。今から一時間くらいな らいいよ（笑）」

「やつた…本当に（笑）」

「なにそれ…（笑）いいよ…
歌いたい気分だし（笑）」

僕は本当に嬉しかった… なんでこんなにうれしいのかわからなかつ

たらないが……貴女に一人で会える事が嬉かつ。

貴方と待ち合わせたカラオケ店に僕は少し早くついた。

貴方は少し時間を過ぎてから……てをふりながらあはつと笑いながら、現れた。

「『めんね…待つた？
どしたの急に？』

「友達誘つたけど…みんなことわ られただけ！！」

本当は違うが…僕はウソをついた。

「そつか～」

貴方は少しうそに気づいたような気がした。

カラオケは楽しかった。

貴方は僕の歌ううたを面白い歌と言つて二コ二コ笑いながら聴いている。

僕は貴方の歌う歌が寂しい歌ばかりで…貴方を笑わせたかった。

2時間喋ることもなく、歌つた。

帰り際に僕は貴女に行つた。

「また誘つていい？」

貴方はまたあはつと笑い

「いいよ。」

と微笑んだ。

家に帰つて僕は貴女にメールした。

「ありがとう。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0262ba/>

貴方と僕の携帯恋愛～僕は貴方を傷つけた～

2012年1月10日15時47分発行